

協議会ニュース

17号

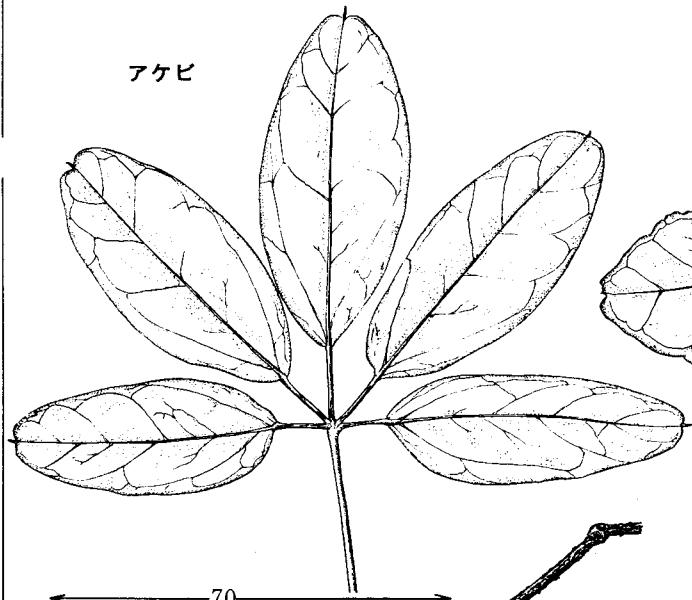
愛知県自然観察指導員連絡協議会

61.12

(単位はmm)

アケビとアケビコノハ

アケビ

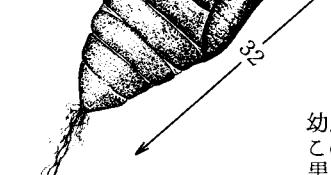


30

アケビの実

眼状紋

アケビコノハ
のさなぎ
(側面)



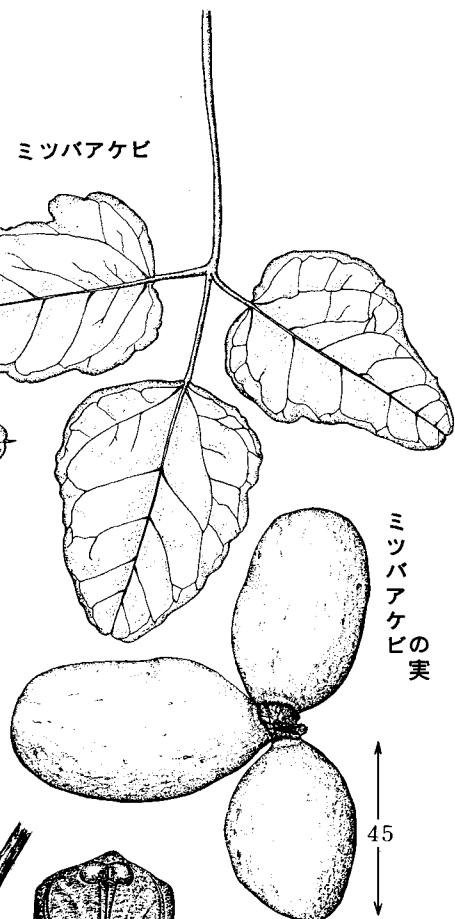
35

アケビコノハの幼虫

幼虫は休んでいるときはほとんど
このような体形をとる。
黒かっ色と緑色のタイプがある。

葉を2~3枚綴って粗まゆを
つくり、中できなぎになる。

ミツバアケビ



ミツバアケビの
実

アケビコノハのさなぎ
(腹面)



粗まゆの糸に腹端を
からめつけている。

1986.10.15
安城市安城町大山

協議会ニュース 17号

・アケビとアケビコノハ (辻 伸夫)…表紙

・会員紹介 2

私と自然 (竹内哲也)

・特集・郷土の自然 3

身近な自然について (山本尚三)

アンケート結果から (P. 14)

・会員広場 7

自然とのふれあい (外山有一)

一步下がって (高橋康夫)

自然観察会に思う (高瀬和之)

食うことと遊ぶこと (佐藤国彦)

・支部だより 9

名古屋支部 知多支部 東三河支部

奥三河支部

・観察と研究 11

香嵐渓の春 (岡田慶範)

・行事報告 14

特別研修会 (9. 13 ~ 14) 段戸裏谷観察会 (11. 3)

理事会 (11. 24) 臨時総会 (12. 4)

・行事案内・お知らせ 15

行事案内 会員移動 お知らせ

前号の訂正 編集後記



アケビとアケビコノハ (表紙絵)

秋の野山で、アケビの美しい
うす紫色の実を見つけましたか。
この実が熟するまでに、このア
ケビにはいろいろな自然のドラ
マがあったことでしょう。

春、花の咲くころには、その
香りに誘われてハナバチたちが
たくさん訪れました。若い芽に
はアブラムシが……そしてアリ
たちが生活の場として利用して
いました。

アケビコノハ。この大きくて
美しいガもアケビの葉を盛んに
食べました。何回もアケビのつ
るは葉を全部食べられてしま
いましたが、アケビコノハの幼虫
が姿を消すころには、また新し
いつるを伸ばして茂ってきます。

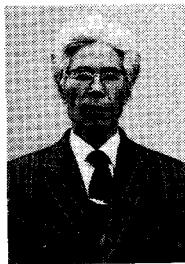
このように、植物に深くかか
わっている生きものたちの生活
を合せて観察するのも楽しいも
のです。

私たちは、とかく大きな実を
つけた季節にしか、アケビを見
上げない、関心を持たない……
ということになります。

花も虫もみんな、生きるか死
ぬかで、一生けんめいなのです。
そんな姿を、静かに見守ってい
きたいのです。

(辻 伸夫)

私と自然



生い立ちと自然観

知多半島の生家は、庭木に恵まれ、家に飛んでくる虫や草花と遊べる環境であった。鎮守の森は、黒々として、恐ろしくもあり、木登りなどのできる楽しい所でもあった。田にはタガメなどの昆虫が多かったが、フナ以外は見向きもしなかった。海でカレイの稚魚をゴム靴でくった事もあった。今から思うと、嘘のようであるが、この頃の体験が現在の自然の状態を比較する時の基準となってしまうのである。父の転勤や自分の勤務で、都会、純漁村、農村、純山村の暮らしを体験した私は、本当の自然はどんな所かが少しはわかるような気がする。

人工環境に育つ子供たちにも自然を体験させなければ、自然保護感は培われにくいと思う。自然観察会の意義はこんなところにあるのではないか。

植物採集からカメラ狂となる

進学のお祝金は植物図鑑に化け、図鑑や採集案内書を見ては山野へ出かけた。短時間になるべく多く歩き、手引書の記載事項の確認と標本づくりのためによく採集をした。

昭和28年の春、段戸山でシャクナゲを二た抱えも切り取って帰る採集家に出会い、啞然とした。私も小規模であるが同類の人間であることを反省した。その頃は自然保護はあまり叫ばれていなく採集を気にしない学者が多くいた。友達が名古屋城内のマルバチシャノキの枝を折るのを見て、採集は、場所と量と繁殖力を吟味しなくてはならないと思うようになった。

その後、この友達と意識的に疎縁となり、なかも失なった私は、一人で各地へ、カメラを持って観察に行くようになった。採集を控え、なるべくカメラで記録しようとしたが、花の色や細かな部分の記録に時間がかかり、費用の点でも大変であった。

竹内哲也（副会長）

観察が自分を守ることを知る

子供のとき父から、火山の恐ろしい話や、腹部を地面につけている野生動物は噴火を予知して数日前に移動する話を聞いた。真偽は知らないが、動物は人間より賢いところもあると思うようになつた。今で言えば指標生物の事である。

伊勢湾台風のとき、観察や観測が恐怖を取り除いてくれた。気圧をグラフにしたり、風で倒れる樹木を懐中電燈で観察したり、瓦の破片が建物に当たる音の向きなどを調べていた。台風のさなかそんな事を楽しんでいる馬鹿者があるかと、お叱りを被りそうであるが、平均風速33m以上のときに高台にある木造校舎の防備は手が着けられなかつたのである。冷静に観測や観察をした結果、「ここは危いから逃げよう」という同僚を説得して思い止どまらせたのが幸いした。（風向きが反対になって、避難予定地の杉の大木が倒れ、下敷きとなるところであった。）気圧、風向、風速の測定、動物や植物の観察をしていた御蔭で命が助かったとも思っている。

そんなこともあって自然観察の重要なことに気付き、益々観察にのめりこんでいった。

自然観察指導員講習会を受講してから

自然の理解の仕方には、自然をマクロに見るという生態的な見方や、採集しなくても観察できることが多いことなど、今まで何となく思っていたことを講習会で明確に指導していただき感謝している。そして、考え方の違いから失ってしまった採集友達のかわりに、本物の自然愛好家の指導員の方々と行動を共にしたり、話を聞かせていただいたりできるようになって、嬉しく思っている。

現在考えねばならないのは、どうしたら自然を守りながら自然に触れていくかということである。自然観察会と自然研究とは、区別して考えないと研究が行き詰まるとも思う。しかし、採るは盗るにつながることがあり、観察の観るは診るであると思うのである。

特集・郷土の自然

身近な自然について

執筆 山本尚三

1. はじめに

「あっだめ、そのシーソー乗っちゃだめ。」
「どうして、かなちゃん乗りたいのに。」
「ほらね、ここが折れてるでしょ。おっこちちやうからね。」
すぐ近くの公園で3才になる娘と交わした言葉である。ジャングルジムの土台も回りの土が雨で流されぐらぐら。ブランコの鎖も切れたまま、ポプラとクロマツの幼木が5本、フェンス沿いのツツジが10数本。20坪ほどのこの公園で、すべり台だけが娘の楽しめるものだった。そのすべり台も夏の日には熱くてふれることもできないほどだったことがある。つい最近、開設以来初めてかと思われる修理がされ、この公園通いが娘の日課となっている。しかし、子どもたちの遊び場がこんなものでいいのだろうか。

私は、愛岐丘陵の一角に造成された団地に住んでいる。ここへ移ってきたころは、緑がいっぱいと喜んでいたのだが、急増する児童生徒のために山林がつぶされ4つの小中学校が建てられた。通学路はは装され、小川にはフェンスが張られた。駅付近の田はうめたてられて駐車場や商店がつくられている。ゴミ捨て場となっている雑木林。汚泥のたまたま雨水貯留地。ここへ雨水が流れこむと真っ黒な汚泥が勢いよく小川へと流れ出していく。その小川もコンクリートで護岸がされている。自然が豊かだと喜んでいた環境も急速に失われてきた。これが都市化といわれるものの一面である。

都市化してきたのは生活環境ばかりではない。生活様式もそうである。くらしに必要なもののはとんどを買い求めるという都市的な生活様式は、カブトムシやメダカまで商品にしている。自給自足の生活の中で保たれていた自然とのふれあいは農山村でもかなり少なくなってきたようである。

電気・ガスの普及で、たきぎ取りのために山に踏み込むこともなくなった。様々な日用品の材料として使われた竹もプラスチック製品の出現やそれを短時間のうちに求めに行ける交通の発達で見捨てられ、竹細工の技術も失われかけている。以前は、自然は四季の変化を知るだけでなく、くらしに取り入れる必要から、経験的ではあるがかなり質の高いふれあいがあったように思われる。それとともに自然の恵みに対する感謝の気持ちや畏敬の念も育んでいた。

それでは、身近な自然の消失や忘却の中で生まれた都市的生活者にとって、自然はどんなものになってきたのだろうか。

それは、一方で自然志向の増大となって現われている。古来、花見や紅葉狩りなど自然を賞める対象としてきたのは都市住民である。近年は、キャンプやスキーなどレジャーの場としても重要な扱いをされている。しかし、このような自然志向のために、多くの自然破壊を生んでいるというのは皮肉なことである。今一つは、都市的生活の支えとして重要視されていることがあげられる。森林の洪水防止や水源かん養など環境保全的効果が認識されてきたのは最近のことである。

このように都市化の中で自然の重要性はますます増大しているわけだが、このきっかけとなった身近な自然についてふれてみたいと思う。

2. 身近な自然の大切さ

自然は、わたしたち人間にとて不可欠のものであり、その効用は全ての人々が享受すべきものである。その程度や質は多種多様であると考えられるが、子どもたちにはより高いものが要求されるだろう。なぜなら、子どもたちは、人間形成の途上にあり、ここで形成されたものがその後を左右するからだ。自然の持つ教育力には他のもので

代替のきかないものが多い。「自然に親しみ育った人間こそが、世界の平和も青い地球も守ることができる。」との考えは多くの賛同を得るだろう。

その子どもたちの成長にはくりかえしがとても大切である。「もう、カエデの葉が赤くなっちゃったよ。」ということばには、若葉のころや落葉後の様子をも想い浮かべた豊かな表現である。こんな表現ができるには、何度もカエデの変化の様子を見ていなくてはならない。くりかえしは、同じことのくりかえしばかりではない。子どもたち自身も日々変わっているし、接するものもじっと

していない。この豊かなくりかえしの中に習熟も発見もある。豊かな感性も思考力も行動の仕方も身についてくるのである。

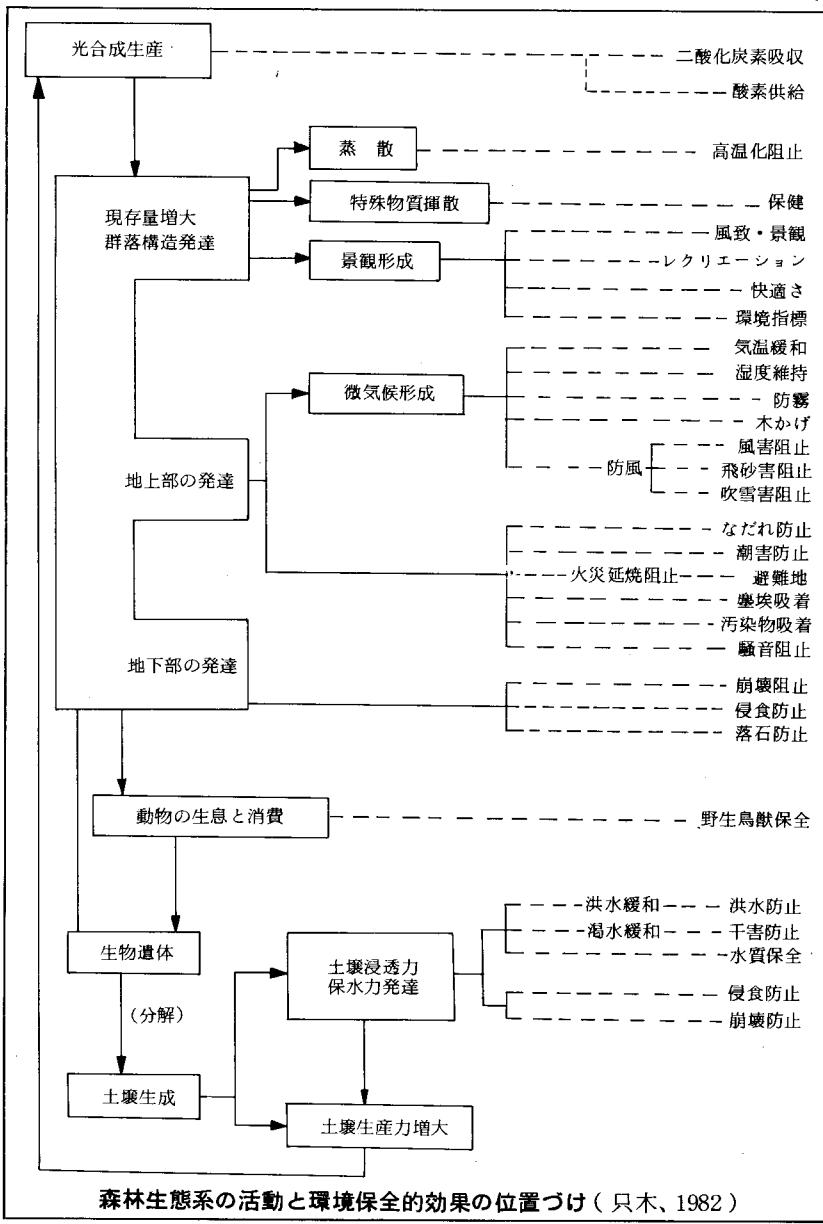
子どもたちのくりかえし接することのできる自然、それは『身近な自然』である。未熟で車などの移動手段を持たない子どもたちのことを考えると一人一人の子どもにとっての身近な自然は本当にわずかである。3才になる娘について言えば、狭い庭と散歩コース沿いにある人手をいく重にもかけた自然?しかない。それも認知力が乏しく事故の心配から保護者つきの散歩の中で、どれほど自分のものにしていることか。

近年、各地に大規模な公園ができているが、そこは子どもばかりではなく若い者から年寄りまで快適に過ごせるよう創られたものがある。せめてこれが家の近くにあればと思うのだが……。

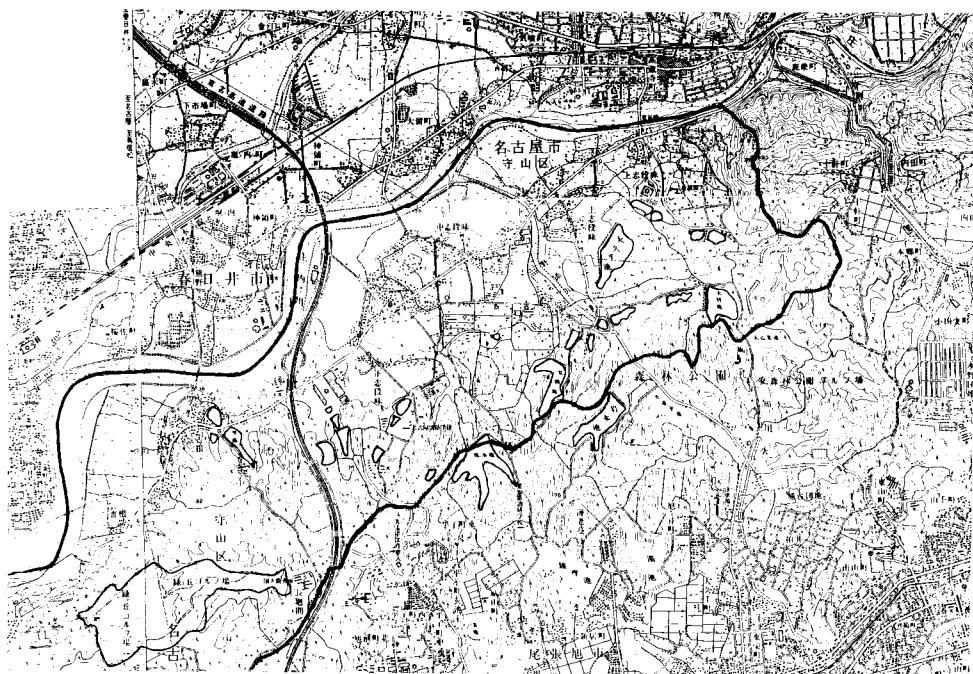
自然の効果は、豊かな自然ほど大きい。でも、身近でなくては、その恩恵を受けられないのだ。身近だからこそ大切なはずなのに、それがどんどん消失し、遠くのもの人工のもので代用されるという今の方向に問題を感じずにはいられない。

3. 都市化と その自然

以前は、豊かであつた身近な自然の破壊・消失のスピードや範囲は、近年特に著しいように思われる。調べてみるとそこには、意図的なものがあると分か



大規模な土地区画整理事業が計画されている名古屋市守山区地域



った。

それは、都市計画法（昭和43年施行）によるものである。この法律は、「健康で文化的な都市生活及び機能的な都市活動を確保するための土地の合理的利用を図ること、都市の健全な発展と秩序ある整備をし、国土の均衡ある発展と公共の福祉の増進を図る」ことのためにできたもので、時代の流れともいえる都市化を計画的に進めようとするものである。そして、都市計画では、市街化を促進する市街化区域と、抑制する市街化調整区域を設けている。この二つの都市計画区域は、更に細分化された地域・地区・街区を指定し、様々な都市施設を配置するようになっている。この計画を実施するために行われるのが、土地区画整理事業である。この事業は、都市計画の母ともいわれるものなのだが、その実施には問題となる身近な自然の破壊を伴っているのだ。区画整理されたところが、以前の面影を大きく失っていることをみれば、自然破壊のすさまじさが推察できる。

地図に示した名古屋市守山区の吉根・志段味両地区は、今この事業が始まったばかりであるが、近い将来には周辺地区のようになっていくだろう。

この地区は、丘陵部にはコナラーアラカシ群落など8群落もの二次林、谷やため池周辺の湿地植物群落を形成する小湿地が、平地には庄内川の氾濫原の名残りを残す広い湿地・住居と混在する農耕地などがあり、都市化の中でまだまだ農村風景を残した地区である。調査報告によれば、この環境に依存する動物の中には、市レベルとしては天然記念物に指定してもいいような貴重な野鳥や昆虫・二枚貝なども発見されたという。これら貴重なものすら、その保護の方策が十分にとられていないのが現実とすれば、まず、その保護をということになろう。しかし、それでいいのだろうか。わずかに残されたものが貴重であればあるほど、地理的には身近かであっても、くらしの中では身近でない自然になってしまふのではないだろうか。

愛知県は、こうした自然の消失をともなう市街

	1位(愛知県)	2位	3位
計	35,231(12.4)	北海道 22,930	東京 16,558
施行済	24,901(12.3)	北海道 18,771	東京 12,423
施行中	10,329(12.7)	埼玉 6,171	千葉 5,891

昭和60年3月 単位ha 愛知県の()内は全国シェア%

土地区画整理事業の施行面積

化区域内での土地区画整理事業の施行面積が全国で最も広く、その整備率は33.1%で、全国平均の20.8%と大きくひらいている。土地区画整理事業は都市計画上の必要性もあり、重要な役割を果しているだろうが、地域の環境に与える影響が大きいだけに、将来を展望した慎重な計画が望まれるのである。

4. 都市化の中での身近な自然の保全

都市化は、身近な自然の破壊、消失を招く一方各地に自然を売りものにした行楽地をつくらせ、開発の名で残されたはずの自然が破壊されている。また、自然を求めて行く人々にも自然に対する無理解や無神経な行動が目立つ。今や一人一人は力のない子どもたちまでが、特定の自然に集中するため自然への加害者となっている。このような脱都会的で非日常的な自然とのふれあいでは、子どもたちの豊かな感性や知性を養うことも日々のやすらぎやうるおいのある生活を送ることもできない。私たちは、ここで脱都会的な自然志向のあり方やその是非についてはもちろん、身近な自然の保全について考える必要があるのでないだろうか。

では、都市化の中で身近な自然を保全していくにはどんな施策や問題があるだろうか。

最も大切なことは、祖先から受け継いだ自然を日々の生活圏の中に残した町づくりをすすめることである。そのため、緑地保全地区の指定や土地利用規制が行われているが、その効果は大きくないうだ。例えば、緑地保全法などによる土地の買い取りは、この20年位に全国で 440 ha・買収総額 424 億円である。都市計画図を見ると緑地保全地区の面積はごくわずかであるし、住居地域と生産緑地地区は分離されている。市街化区域では、農地の宅地転用は容易であるし、山林の消失をも招いている。市街化の山林は宅地としての潜在価値に基づいて相続税が課されるので、果樹園などの農地にかえられるのである。こうしたことから、山林の保全については、税の减免や管理費の援助を受ける緑地協定を結んだり、ナショナルトラストによって守ろうという動きが出ているところもある。ありふれたごく小さな自然まで細かく残す努力を官民一体となって進めていきたいものである。

これまでの町づくりは、みるかけもないほど自然を破壊し、そこに人工的な新しい町をつくり出してきた。川や山までもつくりかえられている。川すじをかえ、川底をさらえ、堤防はコンクリートで垂直に近い護岸工事がされ、さらにさくがめぐらされて人を寄せつけない。山は木を切り倒し地面をけずり取り谷をうめたてて町がつくられていく。最近、都市公園にもよく工夫されたものができてきているが、それでも人工物や取ってつけたようなものばかりが目につき、どこかおかしい。豊かな川に面していながら川で遊べない河川敷公園。丘も小川も池も緑もあるのだが虫も鳥もいない公園。そこにあった自然をもっと生かし、これまで共存してきたたくさんの生き物たちと続けて共存しふれあえる町づくりができるのだろうか。

また町づくりには、失った自然を取りもどす努力も必要である。近年、都市の緑化や河川の浄化などさまざまな取り組みがされている。これらは自然の復原に向けて強く推し進めなければならないことである。小さな幼児のためには、狭い草原細い野道で十分である。遠いところでなく家の庭先に家の近くに、豊かな変化をみせてくれる自然がほしい。自由にふれあえる自然がほしい。大人たちの目線や感性に合わせただけの緑化や浄化ではいけないよう思う。

しかし、自然を保全し、子孫によい環境を残していくことは、行政だけの仕事ではなく、その地域に住む人々の自覚と生活の仕方に深くかかわっていることも忘れてはならない。

都市化の中で環境ばかりでなく私たち自身も都市化されていたようだ。豊かな自然の中で調和のある生活ができるよう自然を深く理解し大切にできる人を育て、新しい生活様式にあった自然とのふれあいの方法を求めてはならないようだ。

	全 県	尾 張	西三河	東三河
自然林等	1.2	0.7	0.7	2.2
二 次 林	12.6	9.0	23.1	6.4
人 工 林	35.2	6.7	35.6	61.0
草 地	0.3	0.5	0.2	0.1
農 地 等	29.5	38.6	28.0	22.5
市 街 地 等	21.2	44.5	12.4	7.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0

昭和58年時点 単位% 植生自然度調査から
土地利用の状況

会員広場



リレー投稿

自然とのふれあい

外山有一（尾張旭市）

私の生まれ育った所は尾張旭市南部の本地ヶ原という軍隊の演習場跡地の開拓地である。地形上開墾しにくく残った、湿地、ササ、スキの草原クロマツ林を主体とした植生で、植物学的に見ると本当に貧相なものであり、貧しい開拓地のこととて、日々の生活に皆手一杯で、動植物の名前を教えてくれる先輩も、親もいなかった。しかし今振り返えって見ると、小さな小川での魚取り、湿地に生える、モウセンゴケのピンクのかわいい花、シラタマホシクサの群生、秋の月見には、キキョウ、ワレモコウ、スキを取りに行った草原などが次から次へと思い起こされてくる。名前も知らず生態への知識も関心もなかったが、自然に囲まれて育ち、心の安らぎを感じていたことだけは確かである。

この地へ大学入学以来15年振りに帰ると、土地区画整理が進み、市街化区域となり毎月のように新築の家が生れつつある。地形上農業的に利用されなかつた原野もほぼ埋め立てられ、昔の面影は今は残されていない。後年、自然に関する少しづかの知識を身につけた私には、幼い頃とは違った意味で淋しく感ずる今日此の頃です。

そんな中で嬉しいことが1つだけあります。子供の頃、珍しい石を探し求めて河原を歩いた矢田川です。当時は陶土の残滓により白濁した流れで魚も見られず、川とはきたないものというイメージでした。現在は谷間の溪流とは言えませんが、水は透明に近くかなり浄化されて来ています。又冬鳥の休息場となっているのを昨年初めて発見して少々びっくりしました。今年の春先の手帳一コガモ、カルガモ、ハ



シプトガラス、セグロセキレイ、ケリ(水浴び中)ハシブトガラス(水浴び中)、カシラダカ、オナガガモ、コサギ、スズメ、カワラヒワ、身近な観察地に出会ったうれしさから、度度出かけて楽しんでおります。

自然観察会に思う

高瀬和之（西尾市）

私は西三河の南部に位置する西尾市に住んでいます。自然が大好きで、○○植物研究会、○○○野鳥の会、西三河の自然を知る会（西三河支部）に所属し、探鳥会、植物観察会、自然観察会と時間のゆるす限りどの会にも参加をしています。

どの会の指導者も自然に対する素晴らしい考えをもっており、なおかつ人間としても立派な人々ばかりです。野鳥の会の人達は、野鳥を中心として植物や昆虫など幅広い視野で自然を見詰めている。しかも、しっかりした記録をしているし自然保護に対する関心が強い。

自然観察指導員の開催している各支部の自然観察会にも参加させていただきました。どの支部にも独自性があり自然観察の方法もまちまちでしたが、どの指導員も熱心であることだけは共通していました。

どの会の人々も「自然を大切にしよう」ということを目的とした指導をしている。「採集はいけない」とか「今までの自然観察会ではいけない」と言う意見の方もいるが、私は自然観察会はこの方法でなければならないと定まったものはないと思っている。時には採集もよし、時には冒険もよいと思う。なぜならどの指導者も自然を破壊してもよいと思って採集をしている人に私は会ったことがないからである。自然物から受ける強い印象を人々の心に残すことが大切であろう。ただし採集をして指導できる人は植物や昆虫の生態をよく理解している人でなければならない。



自然観察の指導で大切なことは、自然に興味をもたない人々に自然の素晴しさを知ってもらうことだと思います。

一步下がって

高橋康夫（豊橋市）

10月上旬、伊良湖岬付近で、県委託の自然観察会が、よい天気の中、一般参加者85名、指導員など19名の参加を得て開かれました。

観察会の進め方は、「サシバの渡り」「風景・地質」「海浜植物」など6つのポイントに指導員による解説者がつき、参加者の回ってくるのを待ちます。参加者も6つの班に分れ、各班には別の指導員が道案内役となり、ポイントをコースにそって一周する形です。

ポイントでの解説は事前に下見され、準備もよく、わかりやすい大きな図や表があつたりして、参加者に好評でした。

この会に、予定外で加わり、解説のしかたについて感じたことは、参加者にわかつてもらおうとするあまりしゃべりすぎたり、考える余裕を与えるなかつたり、話題をたくさん提供する点でした。

これは客観的立場で言えることであつて、自分も渦中へ入れば同じ状況であると反省している。

解説者が一方的に押していくけば、参加者はさがってしまうだろうから、解説者が前へ出るのではなく一步下がって、参加者に前へ出てもらう配慮が必要であろう。

自然観察は現物にすこしでも近づいてよく見よと言われるが、そのような状況づくりを解説の中でしなくてはならないと感じた1日であった。

――――――――

リレー投稿は、投稿者が次の投稿者を指名し、順に続けていくものです。（内容は自由）

次回は、荒巻敏夫、武田芳男、鳥居友春の3名の方にお願いします。（字数500字程度）



食うことと遊ぶこと

佐藤国彦（日進町）

極東の小さな島国である日本が経済大国と呼ばれ、先進国の中の先進国として知られるようになっています。私のような年代の者でも、牛馬で田を耕していたり、薪で風呂をわかしていた時を覚えており、それと比べるとまさに隔世の感があります。人々の暮らしも良くなり、下層階級といえるような者は見られないかのようです。

こうした社会を築きあげて、日本人は満足しているでしょう。しかし、はたして我々はこのままこのようなやり方を進めていいってよいでしょうか。私たちが今の繁栄を得たのは、何かを失ったからであり、また何かがプラスになれば、どこかがマイナスになるものです。

開発により、快適な生活を手に入れる代りに、自然や澄んだ空気を失ないます。激しい労働なしに収入が得られるならば、額に汗する感覚はなくなります。また、私たちが富んでゆくことは、どこかに貧しいものをつくりだしていることにならないでしょうか。後進国がいつまでも貧しいことと今の日本は無関係でしょうか。

中流の生活をしている者にとって恐ろしいのは、人並みの生活ができなくなることです。食うのに困る訳ではないのに、人の持っている物が持てなくなり、人と同じ着物が着れなくなることに耐えられないでしょう。かくして、私たちは人に負けないように走り続けなければならなくなります。それは子供達の生活にも影響していきます。勉強をしなくては人に負けてしまう。人並みの成績をとるために遊んでいてはいけない。皆が負けないように勉強すると、それだけ人並みになるのが大変になります。その一方で何かが失なわれつゝある訳です。

今の子供達が、本当に喜々として遊んでいる姿をほとんど見ることはないような気がします。子供ばかりか、大人さえも遊びに熱中することは少いでしょう。それでいて、我々は本当にうまいものを食べているのでしょうか。

支部だより



名古屋支部

◎指導員交流会の夕べ 8.30~31

星空の観察、於半田市科学館（参加6名）

村松さんの指導により夏の夜空に星の姿を追い求め、遅くまで観察を行った。科学館の屋上にある大きな反射天体望遠鏡での観察で、土星と木星の姿は特に印象深く頭に残った。これに多くの方々の参加があれば交流会の目的は更に大きくなつたと思う。

半田市内で泊った翌日は、武豊町の壱町田湿原に行く。狭い場所ではあるがシラタマホシクサ、シロバナガバノイシモチソウなど貴重な湿原の花が咲き、すばらしい眺めであった。この湿原について武豊町の関係者の非常な努力での保護活動には頭が下る思いである。このような場所は指導員として是非一度は見ておくべきであろう。

◎天白公園予定地の自然観察会 10.19(AM)

天白社教センター前に集合した参加者は19名。快晴ではあったが、この秋一番の強い風の吹く肌寒い日であった。その為か参加者の少い観察会となつた。

2班編成で各班に2名の指導員がつき添つた。この場所は公園予定地であり、3つの山と1つの池で、その周囲は住宅地となった市内に残された貴重な自然地といえる。地元の「天白公園を考える会」からの数名の参加者も含み、池周囲の短時間の観察会であったが、林のつくりや成り立ち、池の野鳥の状況などに、熱心な質問もある良い観察会であったと思う。

来年もさらに良い観察会が期待されるように頑張りたい場所の一つである。

◎八事興正寺のミニ観察会（毎月第1日曜日）

一般参加者が少く、指導員どうしの研修の場のようになってしまっている。参加されていない方も是非一度訪れて、他の指導員の自然の見方を参考にしたり、気楽に話をしてみては如何。

(石田 肇)

知多支部

○7.30 上野公民館自然観察会 於油田池

「この草は利尿にいいんですよ……。若葉の頃つんで食べるとおいしいですよ…」キラリと光るおかあちゃんの目。「この虫は×××といって水の浅いところが好きです……。よく見て、どんなふうに泳いでいるかみてみま…」という前に「ほら先生のいうことをよくきて、名前をちゃんと覚えておくのよ。」またまた、おかあちゃんの声。

夏の親子公民館行事の一環として組まれた、東海市上野公民館わき、油田池での観察会。子どもだけが、親の熱心さにはだされて、理科の勉強にと無責任にはうりこまれるのとは少しちがって、子どもたちにも、自然をみようとする意識は多少あったようだ。が、それにも増して、おかあちゃんパワーの強さをなんとかんじさせる夏の半日であった。

○8.8 夏の夜空の観察 半田空の科学館

○8.20~22 子供教室 主催阿久比町公民館

○9.28 大府市二ツ池自然観察会

右をみると見上げるばかりの中学生、左をみるとまだまだかわいい小学生。残暑ののこる9月28日5市1町（大府、東海、知多、半田、常滑、阿久比）の縁の少年団の交歓会ということで、今年は大府市の二ツ池公園で行なわれた。

マツ、コナラ、ニセアカシアの林の中、ちょっぴり涼をかんじたり、道なき道をとおるやぶこぎをして道に出たらるもの巣だった。そこでついでにくもの巣談議などという一幕も。

さっそうと喜び勇んで池の中を、たもでさぐってみても思うような“獲物”はみつけられずに、なんなくふり回した網の中にショウジョウトンボがはいってびっくり。観察会に意外なことはつきもので、観察会最終地点でのマツバズもうやアメリカヤマゴボウの染色やら、ヒシの実に舌づみをうつ姿は、新人類の野生をわずかにかんじさせた。というのが、終わっての感想だが、縁にさしたる興味をもたない、ジャンケンに弱い集団=縁の少年団のもつ意味は一体なんだろ。

○9.12 虫の音を聞く会 阿久比町公民館

(竹内秀代)

東三河支部

10.5 伊良湖岬自然観察会 一般参加85名

〔経過〕

当日は快晴。サシバの渡り観察には良好の日の為、恋路ヶ浜周辺には全国から多くの人が来ていた。ポイント制をとり、班リーダーがポイントに誘導することにした。ポイントが長い場所ではやや忙しかったが、スムーズな運営が行われた。昼食は班ごとにとったが、昼食を持たないで参加した人も何人かおり、午後の運営ではやや支障をきたした。時間どおり集合でき、まとめに入った。ポイントで説明を使った図がこの時大変役に立った。

〔指導員の反省等〕

- 実年パワーというべき時代の到来を感じる。家族づれも夫婦二人が多く、それに対応できる自然観察会を考える必要がある。
- 参加者、内容の点からも大成功。時間調整に苦労したが、ポイント指導者の協力でうまくいく。
- 初めて班を担当してドキドキであった。下見で教えてもらった動植物ですら「？」来ていただいた方に申し訳なかった。ポイント解説者が神様に見えた。
- 自然観察会の参加者にベテランが増えていることも対応を考えなければならない。人気ある観察会にしていきたいもの。

〔アンケートから〕 数字は人数

①参加者の住所

東三河—19、名古屋—14 西三河—8
尾張—8、知多—3、岐阜—1

②観察会参加の経験

初めて—29、2回目—7、3回目—7
4回目—6、5回以上—4

③比較的良かったポイント

磯の生物—34、サシバ—21、海浜植物—17
風景・地形—12、小鳥—9、風衝林—7

④観察会を希望する月

3～4月—6、5～6月—11、7～8月—5
9～10月—19、11～12月—5、1～2月—4

(支部会報から)

奥三河支部

〔行事経過〕

○牛の滝自然観察会(一宮町) 10.5

指導員も初の観察地で、ぶつけ本番で行ったが、参加者も少数(7名)であって、マンツーマン方式で出来て幸いであった。

殆んど秋の植物観察に費したが、在来種と帰化種との区別が判然としたのがよい結果を得た。

この地方に、このような自然環境がまだ残っていたことは、有意義な観察会であった。

〔地域の出来事〕

- 9.14 ヒガンバナ開花
- 10.8 セイタカアワダチソウ開花
- 10.11 奥三河地方で局地的に雹が降ったが、農作物の被害は少なかった。
- 10.13 コノハズク1羽、桜渕公園にて死体で発見する。ハリオアマツバメを鳳来寺山自然科学博物館で保護。
- 10.20 この地方全域で降霜。
- 10.21 秋の虫終鳴。
- 10.30 豊川用水水源の宇連ダム貯水率42%となる。このまま、まとまった降雨がなければ年内に0となる恐れあり。
- 10.31 この地方全域で降霜。

(木村 滋)

会員広場のカット

- カルガモ(淡水ガモ類) ほかのカモと違って雌雄同色。国内で繁殖する。顔に特徴ある2本の黒線がある。
- オナガガモ(淡水ガモ類) 体もくびも細長く、雄の尾が長い。冬鳥として多数渡来。
- マガモ(淡水ガモ類) 雄の頭は緑色光沢のある黒で、白いくび輪がある。
- キンクロハジロ(淡水ガモ類) 雄の後頭部に垂れ下った冠羽がある。脇と腹は白い。(どれがどれかな?)

香嵐渓の春

岡田慶範（足助町）

香嵐渓の中にある飯盛山には多くの植物が生活しています。カタクリ、キクザキイチリンソウ、ニリンソウ、ナルコユリ、マルバコンロンソウなど数えればきりがありません。この植物たちが咲ききそう春はもうすぐです。この春は、ぜひ飯盛山まで足を運んでください。あなたの心を魅了する何かがあるはずです。

飯盛山とモミジ

飯盛山は標高が254mあり、古代の人々が信仰の対象とした山です。山頂には鎌倉時代から南北朝時代にかけて足助氏の城であった飯盛山城の跡があります。また眼下には足助の町並みが広がり、遠くに目を移せばほぼ同じ高さの山々が続いています。

香積寺は応永34年（1427年）に、足助氏の居館跡に創建された曹洞宗の寺で、かつては常に数十名の雲水が修学に励んだといわれています。

今から350年前に、飯盛山香積寺十一世の住職である參栄和尚が般若心経を一巻となえるごとに、カエデとスギを1本ずつ植え、モミジの名所としての現在の礎を築いたと伝えられています。その後何度か増殖され、現在では11種類数千本のモミジがあります。

次に、各月ごとの植物を中心とした飯盛山の様子をみましょう。おもに山の西～北の斜面にはえる植物を中心にまとめてみました。

3月

寒かった冬が終わりを告げ、太陽の光がだんだんとまぶしくなると、植物たちの芽生えがはじめます。ヤマネコノメソウ・ヤマルリソウ・キブシなどが咲きはじめます。しかし、この時期は何といってもカタクリの花でしょう。上旬からシミのついた葉を1枚ひろげはじめます。これはまだ花の咲かないもので、中旬くらいから花芽をかこ

んで2枚の葉が出はじめ、下旬ごろから花を咲かせはじめます。ちょうど学校が春休みのころ、うすいピンクをしたかわいい花を咲かせます。花盛りは1週間くらいです。旭町や下山村のカタクリの花に比べると、少し色がうすいようです。また、年によって、花の美しいときとあざやかさが欠けるときがあります。

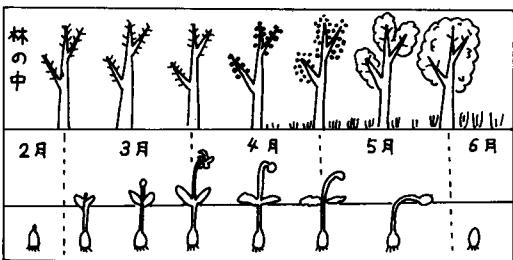
このカタクリが花を咲かせる場所は、知る人ぞ知るという限られた人しか知らなかつたのですが、数年前から新聞などで宣伝するようになり、多くの人たちが訪れるようになりました。そのためか、観察する道幅がだんだん広くなったり、新しいところに道ができたりしてきました。今は、中に入れないようにロープがはられました。カタクリが種から花をつけるまで6～7年はかかると言われています。

『もののふの 花乙女らが 汲みまでう 古井
の上の 堅香子の花』
と大伴家持が歌っています。

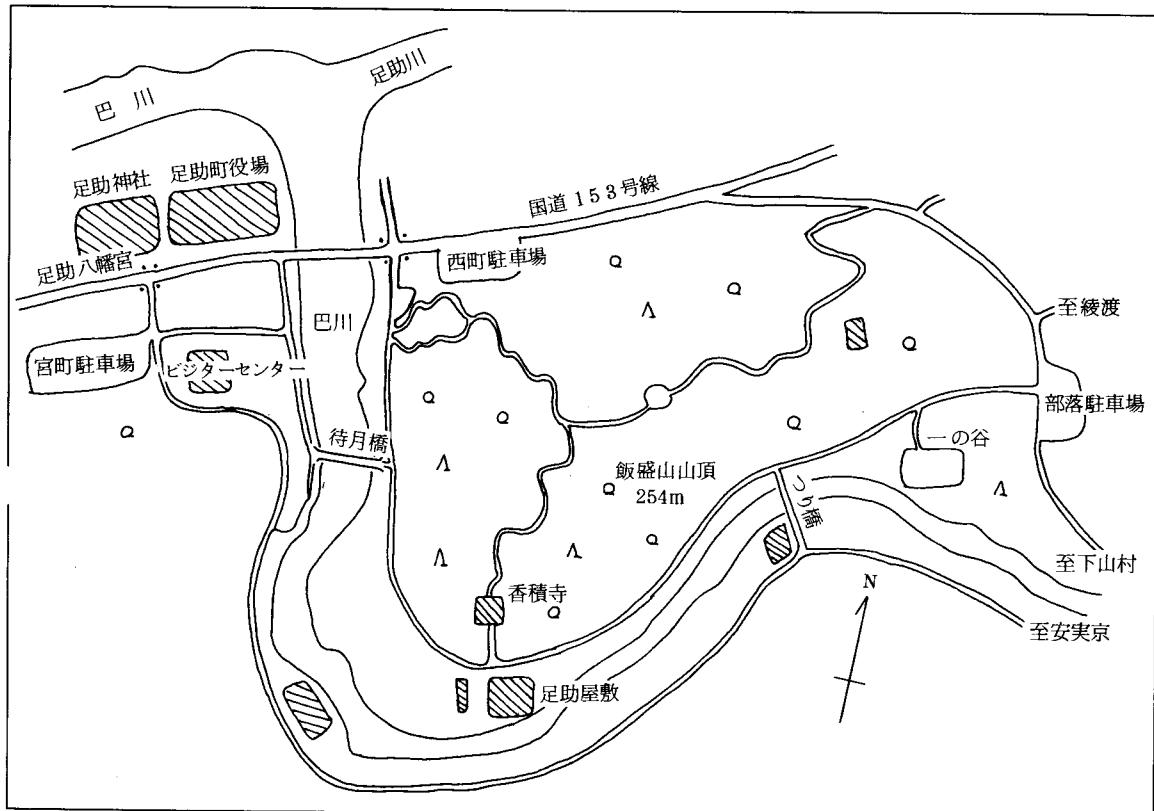
この時期には、キクザキイチリンソウも咲いています。アネモネの仲間で、日を受けて花を開き、夕方や雨の日には花を閉じてしまいます。朝日をあびて開いている花は、何ともいえない気品があります。

4月

カタクリの花がおわるころになると、訪れる人



カタクリの生活史



がめっきり少なくなります。ヤマザクラ・カスミザクラなどのサクラの仲間や、アベマキ・コナラなどのブナの仲間、イロハモミジなどの樹木が葉を広げ花を咲かせるようになります。それにつれて地面に届く光の量がだんだん少なくなってきます。次に花を咲かせる植物たちが生長してきます。

ホウチャクソウやナベワリは山のふもとから中腹あたりに、チゴユリは中腹から頂上にかけて分布しています。ニリンソウの群落は西町駐車場の上に見られ、ヒトリシズカは頂上に登る道から少しそれで、横道に入っていくと斜面に群落をつくるてはえています。写真におさめるなら、咲きはじめが一番よいでしょう。以前にカタクリの群落の近くにウラシマソウがはえていたのですが、いつの間にかなくなってしまいました。

カタクリやニリンソウは春にしか見られません。これは木々の葉や他の植物が葉を広げない早春から晩春にかけての数週間をせいいっぱい生きて、残りの期間は地下茎や球根だけとなって地下で休眠をしているのです。このように、早春他の植物に先がけて花を咲かせ、初夏にはもう葉が枯れて

しまう植物にはこの他に、イチリンソウやムラサキケマンなどがあります。

5月

青空を解のぼりが泳ぎ、木々の緑が濃くなる5月の連休には、多くの人々が訪れます。カタクリは葉が枯れ、実が熟すのをまつ段階です。しっかり熟して実が散るのは中旬頃です。カタクリが毎年掘られて減少していくので、実をとって今の場所より上方にまく努力がなされています。

フタリシズカはヒトリシズカほど多くはありませんが、道から少しはなれて横に入って行ったところに数本ずつかたまってはえています。エビネやトチバニンジンも減ってきてほんの少ししかありません。

巴川の対岸のしき荘付近には雑木林が多いので、コゴメウツギやツリバナなど飯盛山では見られない植物が多くあります。

(この原稿は、「足助飯盛山の花ごよみ」として発行した冊子から抜粋して修正・加筆したもので

花ごよみ(3~5月に開花するもの)

月	3	4	5	6	記事
ヤマネコノメソウ	—	—			ネコノメソウと区別。ヤマは葉は丸く互生
カタクリ	—				リン茎からとれるのが本物の片栗粉
キクザキイチリンソウ	—				キクザキイチゲともいう。花弁はない
キブシ	—				雌雄異株。数珠をぶら下げたような花
ヤマルリソウ	—				花は淡いピンクからルリ色に変化する
タチツボスミレ	—				野原でいちばんよく見かける
ヒトリシズカ		—			4枚の葉が茎にはば十文字につく
ソメイヨシノ		—			葉の出る前に花を咲かせる
シュンラン		—			このあたりではジジババという
ニリンソウ		—			2輪の花。ときどき大きな群落をつくる
ヒメオドリコソウ	+	—			踊子草より小。葉の間に小さい花をつける
ムラサキケマン		—			夏には枯れてなくなる
ジロボウエンゴサク		—			次郎坊は太郎坊(スミレ)に対する方言名
ヤマザクラ	—				少しピンクがかかった花でおおわれている
イロハモミジ	—				タカオカエデ。実はプロペラの形に2個ずつ
マルバコンロンソウ		—			白色の十字状花をつける。木陰にはえる越年草
ナベワリ		—			毒のある葉をなめると舌が割れるという意味
エノキ	—				雄花と雌花。葉には3本の脈が目立つ
ヤマブキ	—				庭や垣根に植えられることが多い
マムシグサ	—				ミズバショウと同じサトイモ科
ホウチャクソウ	—				風りんに似た緑花。山の林の中の暗い所に多い
チゴユリ	—				稚児ユリ。花が斜め下を向いて垂れる
カスミザクラ	—				咲く時期が遅い。ガクと花の柄に毛あり
ニガイチゴ		—			葉裏は粉白色。かく果は赤く熟す
アベマキ		—			葉の裏は白い毛があって灰白色
クヌギ		—			直径2cmほどの実が10月におちる
ヤマツツジ		—			赤色の花なのでよく目立つ
タニギキョウ		—			山の木陰や湿ったところにはえる
ヤブウツギ		—			全体に黄白色の柔毛が密生する。暗紅色の花
ヤブデマリ		—			周辺の白い花は飾り花で実はならない
フタリシズカ		—			2本の花の穂。三人静や五人静も見られる
ツリバナ		—			葉のつけ根から10cm以上の花柄を出す
ヒメハギ		—			ヒメハギ科。蝶形の紫色の花を開く
タツナミソウ		—			花を打ち寄せる波頭に見立てて立波草という
ニセアカシア		—			ハリエンジュともいう。北米原産
コゴメウツギ		—			小米空木。小さな花が枝先に集まって咲く
スイカズラ		—			よい香りの花を2個ずつ葉のわきにつける
ナルコユリ			—		鳴子ユリ。茎は丸く緑白色の花を垂らす
ササユリ			—		葉がササに似ているから。中部地方以西

協議会行事報告

61.9.13～14 特別研修会（環境指標生物）

26名の参加で、環境指標の研修会をくらがり渓谷（額田町）で行いました。13日の午後は、大竹さんと北岡さんの指導で、男川の水生昆虫を調べました。みんな子供のような顔をして川の中の虫を集め。しかし水生昆虫の名前はなかなか頭へ入らなかったようです。その夜は、東洋大学の大野正男先生の環境指標生物の講義を受け、翌日野外実習を行いました。観察会の指導にも役立つ内容であったかと思います。

61.11.3 段戸裏谷観察会（視察研修）

伊東仙治郎さんの案内で、設楽町の段戸裏谷原生林の観察を行いました。モミ、ブナなどの林はまだ紅葉していて、今年最後の秋色を楽しんだことです。裏谷を見た後は、黒田ダムまで車で行き、途中で人工林の伐採地、小湿原などを観察しまし

た。（参加約25名）

61.11.24 理事会

12月に予定されている臨時総会の議案である規約の改正等について、最終の検討を行いました。改正のねらいは、各組織のあり方を見直し、協議会の運営を円滑化しようとするものです。検討結果は、規約改正案として総会案内とともに各会員へ配布しました。

61.12.8 臨時総会

議案……規約の一部改正、組織運営規程の制定、経理規程の一部改正。各議案とも修正意見が出され、細部について一部見直しを行いました。（出席22名）

なお、総会終了後、理事会を開き、規程の内容について調整し、今後の進め方の検討を行いました。

身近な自然のアンケート結果から

編集委員会では、この号の特集である身近な自然をまとめる参考とするため、会員40名ほどにアンケートを行いました。その一部を次に紹介します。（アンケートとりまとめ結果は、回答者に後日送付しますが、他の希望者は佐藤まで御連絡ください。）

- 1 身近な自然として大切なものの、特に保全のあり方を考えねばならぬもの（複数回答）
- 二次林-13 ○社寺林-11 ○農耕地-5
 - 河川-12 ○海岸-3 ○ため池-12
 - 都市公園-3 ○街路樹-2 ○生垣等-0
 - 家からの風景-0

- 2 身近な自然が失われたり、管理が悪くて残念に思ったこと。
- 雑木林の減少-4 ○林へのゴミ投棄-2
 - 林床、マントの手入 ○河川の護岸-3
 - 河川敷の利用方法 ○ため池の護岸
 - 湿地の減少、悪化 ○宅地開発のあり方-3
 - ゴルフ場の建設 ○農地の減少

- 農地整備のあり方 ○自然公園のあり方-2
- シカ、カモシカの減少 ○全般に自然が減る
- 3 身近な自然が大切な理由で重要なもの
- やすらぎ-8 ○子供の情操教育-5
- 環境保全作用-3 ○生態系の維持-2
- 資源として-3 ○遊びの場-1
- 水源かん養-1 ○人工との調和-2
- 共通の財産として-2 ○その他-3
- 4 協議会が行うべきこと
- 観察会の内容、運営を工夫する-3
- 生活と自然のかかわり方を伝える-2
- 自然体験を伝える-1 ○巾広い活動-3
- 関係機関へのはたらきかけ-2
- 身近な自然の実態把握-3
- 情報収集、保全策の研究-3
- 意見の言える会に-1
- 指導員の資質の向上-2
- 個人個人が活動すること-1
- 息の長い活動-1 ○その他-4

（回答者 22名）

行 事 案 内

- 1.4 (日) 名古屋支部 自然観察会（興正寺）
9:30八事興正寺児童遊園集合（午前中）
「冬の植物の観察」
- 1.9 (金) 知多支部 例会「62年度計画」
18:00 阿久比町中央公民館
- 1.11 (日) 奥三河支部 総会、懇親会
10:00 新城市内「さかきや」
- 1.18 (日) 東三河支部 総会 14:00~17:00
豊橋市職員会館（市役所南側）
- 1.21 (水) 名古屋支部 例会
18:30芸術創造センター（地下鉄新栄）
「ボーイスカウトの子供に接して」
- 1.24~25 西三河支部 総会
国民宿舎桑谷山荘 24日15時~
- 1.25 (日) 尾張支部 月例観察会・総会
9:00名鉄善師野駅集合 午後総会
- 1.25 (日) 知多支部 総会
10:30東海市農業センター集合
- 2.1 (日) 名古屋支部 自然観察会（興正寺）
9:30八事興正寺児童遊園集合（午前中）
「八事の森の探鳥」
- 2.8 (日) 名古屋支部 自然観察会・総会
9:30庄内緑地公園グリーンプラザ（地下鉄駅近く） 総会は13:00から
- 2.8 (日) 東三河支部 自然観察会（豊橋公園）
10:00美術博物館前集合（午前中）
- 2.13 (金) 知多支部 例会
18:00阿久比町中央公民館
「知多の自然変化」
- 2.18 (水) 名古屋支部 例会
18:30 名古屋市教育館
「川の観察について」
- 2.22 (日) 知多支部 観察会「冬芽の観察」
10:00阿久比町中央公民館前集合

お 知 ら せ

○自然観察指導員の登録は、3年ごとに更新することとなっておりますが、62年3月は、鳳来町学童農園で講習会を受けた方等が対象となります。
(No.2700~3400)

登録のための用紙は、1月ごろ本人宛に日本自然保护協会から送られてくる予定です。3月に入ても用紙が来ない場合は、事務局へ御連絡ください。

本年更新する手続がなされていない場合も事務局へ御連絡ください。用紙がなければお送りします。

前 号 の 訂 正

前号に次の誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。

- P.6左 葦毛の自然観察
(S57~60年度版) → (S58~)
P.8右 17行目 カタクリの盗掘日
4.2 → 3.30
P.13上 大竹 勝(会員) → (会長)

【編集後記】

早いもので61年の終りとなりました。協議会ニュースは17号を数え、その性格も定ってきたようですが、編集部としても今の形がベストとは考えておりません。面白くて、役に立つ機関紙とするためにも会員の皆様のアイデアや原稿が欠かせません。また、編集委員として力を貸してやろうと思われる方がありましたら、支部の幹事さん等を通じて御連絡ください。

よいお年をお迎えください。 (佐藤)

会 員 移 動

<脱退>

鈴木弘之(名古屋市) 転出
松沢敬子(岡崎市)

編集事務局：名古屋市名東区香南1の101

県営住宅 7-511 (渡並喜一郎)